

身体についての存在論的構造

本学専任講師 西井元昭

(一)

私の身体はそれ自身、物を志向する主体・知覚する主体であつて、自ら身体の状態を生み出すものであると共に私の身体は世界に在る―世界内存在なのである。従つて、私の身体は、一方ではそれが身体である限り客観的世界の唯中の一存在者であると同時に、他方事物を志向する距離の原点でもある。此の身体の両義性こそ、私の身体と私との関係を解く鍵であるであらう。

(二)

私が私の身体性に気付くとき、即ち私の身体は何か(意識又は事物)によつて措定されたり動かされたりするのではなく、その自発性によつて何ものかを志向するのだということが解るとき、世界が私に開示されるものであるということも解る。私にとつての世界とはコギト以前の地平・前述定的な地平で暗々裡に了解されているものであつて、それを感じとるのはかかる私の身体に他ならない。換言すれば身を以つて世界を了解することなのである。そして、私の身体という資格(身体性又は身体の両義性)に

於いて、自己の存在が世界内存在であることに気付くのでなければならぬ。私と世界との内的な結びつきは、人間の存在性が身体性であることによつて可能なのである。

(三)

私の身体は他者との交流に於いて、他者の身体を通して他者を、そして脱自としての私の実存と同じく脱自としての他者の実存との共存を私に告知するのである。これこそが、メルローポンティの言う間身体性、フッサールのには身体的間主観性に他ならないのであつて、他者とのかかる共現前は夫々の身体を通して一つの状態を生み出すのである。即ち私の世界が彼の世界と出会うとき、私の身体も彼の身体も共に一つの状態を感じとる。従つて他者との交流は、身体的地平に於いて私の身体がその状況をとらえることになるが故に、私の身体は状況内身体としての存在なのである。

我々が身体性を論ずるのは、物と意識との間にあつて、又、客観的世界と間身体性の世界(世界内存在の世界)との関係に於いて、それらの弁証法の担い手としての私の身体が存在論的にも現象学的にも不可欠であるといふことのほか、哲学がややもすると構成的意識という哲学者の職業的詐術に知らず知らずに終始し、生きた人間存在を自らにさえ閉ざしたまままで過ごそうとしがちであることに對する自省なのである。

四

世界の了解と世界内存在としての自己の了解とは同時的というよりもむしろ同じことなのであろう。かかる了解即ち私の身体を通しての(身を以っての)了解とは勿論前述定の知なのあるが、その知とは一体感覚なのか、直観なのであるか、それとも知覚なのであろうか。メルローポンティによればそれは根源的感覚であるが、フッサールの根源的印象や心理学的体感と混同しないためには、ここに於けるその知を根源的知覚と名付けられるべきではないであらうか。諸氏の御批判を給われれば幸甚に存じます。

以上

尚、本講演についての詳細は後日、大谷学報誌上で論文の形式にて発表の予定であります。

湖北神照寺の中世資料

本学専任講師

佐々木孝正

中世において地方寺院が、宗教的にいかようなありかたをしていたかを具体的にあらわかにすることは、わが国中世仏教史研究における課題の一つであらう。すなわち、地方寺院の宗教的な活動が、武士、農民、あるいは商人といった在地住民との交流を通じて解明される必要があるのである。地方寺院を構成する住侶の

性格、そこでおこなわれる年中行事や各種法会の内容とその宗教的目的、およびそれらへの住民参加のありようが検討されねばならないのである。

特定の豪族や支配者によって建立され、彼等の盛衰と運命をもにする菩提寺のほか、中世には山岳霊場や霊場信仰に支えられた庶民的寺院が、納骨や先祖供養を通じて、庶民の宗教的要求にこたえていた。また村落にも寺庵や村堂のごとき小規模な宗教的施設があつて、村落共同体の生活と密着したかたちで、その精神的紐帯の一として機能していたことは周知のところである。これらのほか寺社領荘園等に存在し、多数の塔頭を擁して一山を構成する顕密諸宗の寺院等も多いのであるが、これらについても、その宗教的な活動が地域住民との関係においてあらわかにされていかねばならないのである。湖北の神照寺はこのような寺院の一と考えられるが、そこに所蔵される若干の中世資料をとりあげ、室町時代における地方寺院の庶民寺院的な側面を少しく考えてみることにしたい。

神照寺は日出山と号し、明治二十七年以降新義真言宗智山派智積院末の真言宗寺院として現在に至っているが、寺伝によれば寛平二年宇多法皇の御願として、本覚大師益信により開創せられたとみられる。文龜年間に山城醍醐寺報恩院末となり、江戸時代には、金胎両部の大日如来を安置する本堂を中心に、学頭無量寿院をはじめ、一山二十余坊で構成される百五十石の朱印寺であった。

中世の神照寺については、その寺歴はあまり詳らかではなく、